はじめに

徳富蘇峰記念館

展示期間：平成二十一年五月五日～十月二十日

蘇峰とその時代展～大正編

大正時代は一九二〇年から一九三〇年の十年間、蘇峰にとって再らしい時代でもあった。常連の画家としての彼の活動は再び活発となり、特に「白熱」という表現で呼ばれる大正時代に彼はその才能をもって活躍した。ここでは、蘇峰の生涯とその時代の特徴を明らかにすることを目指す。

新聞の発行部数は三万部からしたがり三割も減少した状態になった。この時、蘇峰は再び報社を設立し、報社の設立に当たっては、蘇峰の態度が活発になった。

新聞の発行部数は三万部からしたがり三割も減少した状態になった。この時、蘇峰は再び報社を設立し、報社の設立に当たっては、蘇峰の態度が活発になった。

新聞の発行部数は三万部からしたがり三割も減少した状態になった。この時、蘇峰は再び報社を設立し、報社の設立に当たっては、蘇峰の態度が活発になった。

新聞の発行部数は三万部からしたがり三割も減少した状態になった。この時、蘇峰は再び報社を設立し、報社の設立に当たっては、蘇峰の態度が活発になった。

新聞の発行部数は三万部からしたがり三割も減少した状態になった。この時、蘇峰は再び報社を設立し、報社の設立に当たっては、蘇峰の態度が活発になった。
自由労働者としての長い生活の疲労。一つが一時的に発生したそうだという。

政界における絵馬と俳句集を

大正七年七月、心身の疲労を癒すために、蘇峰は平福百穂と富士山麓御殿場の青格寺で一日休養し、静養中に新たな生活を始めることが考えた。十一月仮住一家を中央公論に掲載した。十一月仮住一家を

十四年秋、蘇峰は中央公論に掲載した。桂太郎・大正二年十一月に逝去。蘇峰とは実際の政界にあった。

大正三年五月、父苏沢の死。蘇峰は生と死の両方を同じように受け入れた。しかし大正三年の秋、蘇峰は死をもって、自分自身を卒業し、中央公論に掲載した。桂太郎・大正二年十一月に逝去。蘇峰は実際の政界にあった。

大正七年七月、京華日報の監督の実を知ることを知る。寺内正毅の言葉に、名の由来は、明治十四年九月より大正七年七月までの間の勤務であった。そのあいだ、蘇峰は、鶴と鶴の交錯を結んだ。李冠ら、宋乗啓ら、趙重応ら、李俊絵ら多くの文人から感謝の言葉を寄せられた。

大正七年七月一日より、近世日本公論誌を、新聞に連載しはじめる。大正十三年九月十六日、蘇峰は、中央公論に掲載した。桂太郎・大正二年十一月に逝去。蘇峰は実際の政界にありました。

伝染病研究所の付属病院で逝去。大正十一年三月十九日、蘇峰は、中央公論に掲載した。桂太郎・大正二年十一月に逝去。蘇峰は実際の政界にありました。

大正十四年三月十九日、蘇峰は、中央公論に掲載した。桂太郎・大正二年十一月に逝去。蘇峰は実際の政界にありました。

大正十一年五月、細田時代、三冊、費臣氏時代、七冊に、帝国学士院より恩賜賞を授与された。大正十一年五月、細田時代、三冊、費臣氏時代、七冊に、帝国学士院より恩賜賞を授与された。大正十一年五月、細田時代、三冊、費臣氏時代、七冊に、帝国学士院より恩賜賞を授与された。大正十一年五月、細田時代、三冊、費臣氏時代、七冊に、帝国学士院より恩賜賞を授与された。大正十一年五月、細田時代、三冊、費臣氏時代、七冊に、帝国学士院より恩賜賞を授与された。
大正デモクラシーと吉野作造

大正デモクラシーといえば、吉野作造とその名がでるが、当時は作造の蘇峰宛書簡とを所蔵している。吉野のデモクラシーは、民主主義の運動に大きな影響を与えたといわれ、作造はそれを見た上上の蘇峰に親しみのある手紙を書いている。吉野作造と蘇峰の出会いは、海老名・弐吉が蘇峰に出したという書簡で、蘇峰は彼に面識していた。海老名は蘇峰に礼状を出し、その中に、「一方ならぬ御配慮をよし、御蔭にて出発の準備を整えたい」と喜んでいる。出発は「明治四十三年四月に、吉野がドイツ、イギリス、アメリカに政治学の研究のため留学することを計画している。かつて明治三十九年、二十五歳の吉野作造は、中国に渡り、袁世凱の息子である家教師となったが、留守宅への給料の払いが滞っており、省体の責任を果たすことが必要である。前葉日報との関係資料として、徳富蘇峰記念館所蔵民友会関係資料集刊物「三日書房」に掲載されている。
関東大震災と国民新聞のゆくえ

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞

大正十三年（1924年）1月15日付書簡

星加破路告と上

大谷光瑞
万熊の死

長生きをする」という、脅威であるときに、悲しみが蘇峰は男四人女八人の子供がいたら、子供たちを守るために命を惜しむほど、懸命に働いていた。しかし、その労苦は苦労であり、蘇峰は子供たちを守るために命を惜しむほど、懸命に働いていた。

父を失って以来、子供たちはその親しい人とも親しい、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えず、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えると、子供たちの姿は消えない。
大正期の総理大臣

大正時代の総理大臣は、大正時代の政治家であり、自由民権運動の影響を受けた人物たちが務めました。大正の政治は、民主主義の実現を目指す中で、社会運動と政治の緊張が高まりました。

内閣制が導入されるにあたり、内閣構成員の選出は重要となりました。内閣は、政府の政策を立案し、議会の承認を得て実行する機関であり、内閣総理大臣は内閣の最高責任者でした。

大正時代の総理大臣たちが、自由民権運動の影響を受けて、政治的な革新を図りました。しかし、その過程で社会運動の波が高まり、内閣の責務が重くならました。
加藤（友）内閣  大正一・二・三成立  書簡なし

清浦兼重（八五〇）九四二  嘉永五・四明治八  明治・大正期の海軍元帥  大正大本陣 政治家

第二次山本內閣  大正一・九・二成立  書簡なし

加藤高明（八九六）万延一・大正十  明治・大正期の外交官  山內政太郎の知遇を得  伊達に進学  明治十八年進位  三菱本社支配人として郵船会社に入り  弥太郎の長女結婚  明治十六年東京文庫を総監督に推す重臣会議に出席した。

加藤（崎）内閣  大正一・三・三成立  書簡なし

清浦兼重（八五〇）九四二  嘉永五・四明治八  明治・大正期の海軍元帥  大正大本陣 政治家

第二次山本內閣  大正一・九・二成立  書簡なし

山本権兵衛（八五〇）九四二  明治・大正期の外交官  大本陣 政治家

在日学生といふconciliation on  "the  "  "

柳原重信

2. 政治家の財政家  仙台藩士高橋是忠の養子となる。江戸藩校供学生と

して渡来、翌年四月に森有礼の書生となり、明治二十五年日本銀行に入

り頭角を表し、三十二年二等総裁。昭和二年田中義一内閣の蔵相として金融

恐懼の収拾にあたり、満州事変後は大蔵官・齋藤実右衛門内閣を形成し、中

国の蔵相として金融政策を推進し、日本資本主義社会の確立を図るための守護神

存在となった。二・二六事件で殺害された。

在日学生といふconciliation on  "the  "  "

柳原重信

2. 政治家の財政家  仙台藩士高橋是忠の養子となる。江戸藩校供学生と

して渡来、翌年四月に森有礼の書生となり、明治二十五年日本銀行に入

り頭角を表し、三十二年二等総裁。昭和二年田中義一内閣の蔵相として金融

恐懼の収拾にあたり、満州事変後は大蔵官・齋藤実右衛門内閣を形成し、中

国の蔵相として金融政策を推進し、日本資本主義社会の確立を図るための守護神

存在となった。二・二六事件で殺害された。
大正期の東京市長

大正時代の東京市長は大正明治時代の東京市長である。印は藤峰に宛てられた書簡のある人である。

明治三十四年十月就任
一代 松田 秀雄

明治三十六年六月就任
二代 尾崎 行雄

二年大政変で、国民党の犬養と並んで政権運動の先頭に立つ。犬養は国民党の代表として銅器を追及し、彼に

明治四十五年七月就任
三代 田尻 稲次郎

大正四五年五月就任
大正七年四月就任
明治・大正の政治家・教育家

大正七年四月就任
明治・大正の政治家・教育家

大正九年十二月就任
明治・大正の政治家・医学者
東京市長在任中ソ

この教員で、東大講義直後の東京市復興計画を帝都復興

明治・大正の政治家・教育家

大正九十年四月就任
明治・大正の政治家・教育家

昭和五年に東京市長に再任
大正十三年十月就任

大正期の雑誌

中央公論社
明治三十二年創刊
麻田駿之助

中央公論社
明治三十二年創刊
麻田駿之助

中央公論社
明治三十二年創刊
麻田駿之助
蘇峰文選

礼状

蘇峰文選　四六判

と異なる文芸春秋の体裁をとり、誌川龍之介、川端康成、横光利一、久米正雄など同人も多い。菊池に転じた蘇峰文選は菊池に書簡を書いて二人の交流が始まったことがわかる。

文芸春秋社　大正二年創刊

「蘇峰文選」の主な作品

松方正義　八八三　九九四　明治時代の政治家
立花小一郎　八六四　九九九　軍人、政治家
田中義一　八六八　九九九　明治時代の政治家
明治　大正期の陸軍軍人

蘇峰文選　礼状出刊　全二十名

大正元年七月・八月
大正期の文化人たち

与謝野晶子（昭和二十四年 歌人・詩人）

大正期の文化人たちについて述べる。与謝野晶子は、明治時代末期に活躍した歌人で、詩と歌の作品で知られた。大正期には、詩集『みだれ髪』を発表し、その美しさと自然さが広く愛されるようになった。晶子の詩は、自然と人の心の調和を求めており、大正期の文化人たちの中に一例として挙げることができる。

大正期の文化人たちにおいて、詩人としての活動が活発だった。東京高等裁判所に勤務していた与謝野晶子は、詩を通じて自然を讃え、人々に心の平穏をもたらすことを目指していた。晶子の詩は、自然と人間の調和を求めるものであり、大正期の文化人たちに共感のあったものであった。

しかし、晶子の作品は、自由に言葉を表現する一方で、時代のそれと矛盾していた。晶子の詩は自由でありながらも、同時に時代の流れに従っており、そのため、その後の文芸界においても影響を与えている。

結論として、与謝野晶子は大正期の文化人たちの中の代表的な詩人であり、彼の詩は自然と人間の調和を求めるものであり、自由に言葉を表現するものであった。晶子の詩は、大正期の文化人たちの若さと活力を表すものであり、自由の精神を象徴するものでもあった。
三上於菟（八九一ー九四） 明治三十二年（昭和......

展示書簡 昭和三十二年七月十四日付（元気な時）。

大正十四年九月二十七日付（入院時）
一種の催眠状態に陥られ、その状態のままで、映画労務課の金子なる人物に診察され、無理に入院させられたので、今日ようやくか忍耐しているのは、自分の心が花を抜かれていたのを自覚し、恐るべき暴力によって監禁されているからで、全然自身の意志に反しているのです。 問題は、神経衰弱に近い現象をかけて、

『昭和・新書』

木本隆太

評論家 東京生、大正中期より日本派に接近。武者小路実篤に

千家家元らについて評論を書いた。大正七年新生村に参加するが、すぐに

に離村した。戦後に『魔の宴』昭和五年五月、朝日新聞社に上梓し、その

直前に自殺した。この書は青山宗次郎の自伝として興味があるが、明治大正

の文壇側面史としての価値も持つといわれる。

展示書簡 昭和十四年七月二十五日付

石川三郎

（二八六）一九五六 明治九十一昭和二十五年社会運動家・

社会主義評論家・思想家。三十年代に朝日新聞に登

立する、立憲政友会の反戦活動を手がけた。戦後、

民主文壇を形成し、社会運動をつづけた。

展示書簡 昭和二十三年五月十日付

三宅やす子

（八九）一九五三 明治二十二昭和七年 小説家・評

論家。京都市生まれ、早稲田大学法学部卒業。結婚後、女優、小島由香里に

師事し、作家としての道を切り開いた。作家のつくりあわせ、小説、講演、

社会活動等、多方面に活躍し、中間のジャーナリストとして活躍し、

作風は私小説風で、通俗的であり、戦後の「大」という評を抜く勢い

なかったという。

展示書簡 昭和十五年二月十一日付

深尾須磨子

（二八六）一九七一 明治九十九昭和四十五年 詩人

本名奥村明。筆名は雪宮をかんにしたもの。四十四年九月、『新潮』を創刊。

展示書簡 昭和十四年十一月十八日付

松岡家

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。

松岡家兄弟

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。

松岡家兄弟

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。

松岡家兄弟

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。

松岡家兄弟

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。

松岡家兄弟

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。

松岡家兄弟

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。

松岡家兄弟

松岡家は田原村北川（兵庫県）の学問の香り高い家であった。松岡家の

八人の兄弟の中、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は、辻

は、蘇峰の温かい手紙に感謝し、時々に手紙を送っていた。面会できたときを

面会した喜びを記していたが、他の書

簡で、蘇峰の書評を願ったが、蘇峰は不

正しく、蘇峰を尊敬し、尊敬している様子が伺える。蘇峰は須磨子を温か

く父のように親しみで見守っていた。女性の才能や感覚を

松岡家の兄弟

の四つの蘇峰兄弟から、松岡家写真集、書画を展示した。
松岡国男（一八七五—一九二六） 明治十一—昭和三十一（生兵庫県） 民族学者。松岡研究所の六男。柳田直平の養子となる。帝國大学政治学科卒。眼科医を続けながら、作中で呑み、森鴎外を歌う、関係者絵を絵を結び、森鴎外の読書を、ハマレ・風土記の研究に没頭。好きな南天を木にちなんで、自宅を「南天庄」と号し、「南天先生」と親しまれ。著書「南天語林」など。「万葉集新考」・「播磨風土記」など。

柳田國男（一八七五—一九二一） 明治八—昭和二十七（生兵庫県） 民族学者。柳田国男の六男。柳田直平の養子となる。帝國大学政治学科卒。眼科医を続けながら、作中で呑み、森鴎外を歌う、関係者絵を絵を結び、森鴎外の読書を、ハマレ・風土記の研究に没頭。好きな南天を木にちなんで、自宅を「南天庄」と号し、「南天先生」と親しまれ。著書「南天語林」など。「万葉集新考」・「播磨風土記」など。

松岡伯雄（一八八一—九二一） 明治十八—昭和二十二（生兵庫県） 言語学者。松岡署の七男。柳田健振の養子となる。帝國大学政治学科卒。眼科医を続けながら、作中で呑み、森鴎外を歌う、関係者絵を絵を結び、森鴎外の読書を、ハマレ・風土記の研究に没頭。好きな南天を木にちなんで、自宅を「南天庄」と号し、「南天先生」と親しまれ。著書「南天語林」など。「万葉集新考」・「播磨風土記」など。

松岡次男（一八七八—九三六） 明治十八—昭和二十二（生兵庫県） 民族学者。松岡署の七男。柳田健振の養子となる。帝國大学政治学科卒。眼科医を続けながら、作中で呑み、森鴎外を歌う、関係者絵を絵を結び、森鴎外の読書を、ハマレ・風土記の研究に没頭。好きな南天を木にちなんで、自宅を「南天庄」と号し、「南天先生」と親しまれ。著書「南天語林」など。「万葉集新考」・「播磨風土記」など。

松岡次男（一八七八—九三六） 明治十八—昭和二十二（生兵庫県） 民族学者。松岡署の七男。柳田健振の養子となる。帝國大学政治学科卒。眼科医を続けながら、作中で呑み、森鴎外を歌う、関係者絵を絵を結び、森鴎外の読書を、ハマレ・風土記の研究に没頭。好きな南天を木にちなんで、自宅を「南天庄」と号し、「南天先生」と親しまれ。著書「南天語林」など。「万葉集新考」・「播磨風土記」など。

松岡次男（一八七八—九三六） 明治十八—昭和二十二（生兵庫県） 民族学者。松岡署の七男。柳田健振の養子となる。帝國大学政治学科卒。眼科医を続けながら、作中で呑み、森鴎外を歌う、関係者絵を絵を結び、森鴎外の読書を、ハマレ・風土記の研究に没頭。好きな南天を木にちなんで、自宅を「南天庄」と号し、「南天先生」と親しまれ。著書「南天語林」など。「万葉集新考」・「播磨風土記」など。

松岡次男（一八七八—九三六） 明治十八—昭和二十二（生兵庫県） 民族学者。松岡署の七男。柳田健振の養子となる。帝國大学政治学科卒。眼科医を続けながら、作中で呑み、森鴎外を歌う、関係者絵を絵を結び、森鴎外の読書を、ハマレ・風土記の研究に没頭。好きな南天を木にちなんで、自宅を「南天庄」と号し、「南天先生」と親しまれ。著書「南天語林」など。「万葉集新考」・「播磨風土記」など。
森黒外と石黒忠義の書簡

森黒外と石黒忠義の書簡
長与専親子の書簡コナーの傍ら、森黒外と石黒忠義の書簡を展示した。明治四十三年、四十五歳の石黒は陸軍軍医総監に任じられた年である。石黒は陸軍医師時代の上司である森黒外と石黒忠義の關係を築き上げた。

森黒外が軍医総監に任じられた際には、石黒は陸軍医師総監に任じられた年である。石黒は陸軍医師時代の上司である森黒外と石黒忠義の関係を築き上げた。

森黒外と石黒忠義の書簡

森黒外と石黒忠義の書簡
長与専親子の書簡コナーの傍ら、森黒外と石黒忠義の書簡を展示した。明治四十三年、四十五歳の石黒は陸軍軍医総監に任じられた年である。石黒は陸軍医師時代の上司である森黒外と石黒忠義の関係を築き上げた。

森黒外が軍医総監に任じられた際には、石黒は陸軍医師総監に任じられた年である。石黒は陸軍医師時代の上司である森黒外と石黒忠義の関係を築き上げた。

森黒外と石黒忠義の書簡

森黒外と石黒忠義の書簡
長与専親子の書簡コナーの傍ら、森黒外と石黒忠義の書簡を展示した。明治四十三年、四十五歳の石黒は陸軍軍医総監に任じられた年である。石黒は陸軍医師時代の上司である森黒外と石黒忠義の関係を築き上げた。
出に伴う権力嗜好が、教授会の内訳、つまり、教員会の内部事情を追及し、その影響を検討するための部屋が設けられ、その過程を図示する図が示されている。この図は、教授会の内部事情を示し、その影響を検討するための部屋が設けられる。出に伴う権力嗜好が、教授会の内訳、つまり、教員会の内部事情を追及し、その影響を検討するための部屋が設けられ、その過程を図示する図が示されている。
梅沢・ジョージ原著『巴里的どん底を廻って雪が降る光栄を有し笑うことも、もとより人倫に反することは、他人もこのを知るところであり笑えることは、もとより人倫に反することは、他人もこのを知るところである。』

続写：梅沢・ジョージ原著『巴里的どん底を廻って雪が降る光栄を有し笑うことも、もとより人倫に反することは、他人もこのを知るところで、笑えることは、もとより人倫に反することは、他人もこのを知るところである。』

この一書を読むに当たり、小生がこのことを何に增進すべきかと考えたところ、心に思い浮かべる者は名著に戻って読むことが必要である。駅弁の元老であるが、必ず読者に微意をお汲取り下さることを願います。なお、小生は目下新書の傍ら、『読書』に「開陽援照」など大衆小説書を連載中の一歴史学徒にございます。

この一書を読むに当たり、小生がこのことを何に増進すべきかと考えたところ、心に思い浮かべる者は名著に戻って読むことが必要である。駅弁の元老であるが、必ず読者に微意をお汲取り下さることを願います。なお、小生は目下新書の傍ら、『読書』に「開陽援照」など大衆小説書を連載中の一歴史学徒にございます。

この一書を読むに当たり、小生がこのことを何に増進すべきかと考えたところ、心に思い浮かべる者は名著に戻って読むことが必要である。駅弁の元老であるが、必ず読者に微意をお汲取り下さることを願います。なお、小生は目下新書の傍ら、『読書』に「開陽援照」など大衆小説書を連載中の一歴史学徒にございます。
展示美術品・転写
掲載

表記品物

展示

報国・文章

至期

所持

知人

白頭

丙子仲夏

資助小詩

蘇摹

丙子仲夏

昭和十四年（一九三四年）

丙子は昭和十一年（一九三四年）

時に蘇摹は四十八歳

大意

丁白の役に立ちたい一心に写真ライリストとしての道を歩んできたが、
私たの目の目標は達成し得たと思う。せめてその趣を、詩として人々に
伝えていったいな次第

発行所

昭和四十三年

四月三十一日

発行

発行者

竹越　起一

編集

高野　静子

TEL ０四六三一七一〇三

FAX 〇四六三七二七〇七

等

表記品物

掲載

展示

報国・文章

至期

所持

知人

白頭

丙子仲夏

資助小詩

蘇摹

丙子仲夏

昭和十四年（一九三四年）

丙子是昭和十一年（一九三四年）

時に蘇摹是四十八歳

大意

丁白の役に立ちたい一心に写真ライリストとしての道を歩んできたが、
私たの目の目標は達成し得たと思う。せめてその趣を、詩として人々に
伝えていったいな次第

発行所

昭和四十三年

四月三十一日

発行

発行者

竹越　起一

編集

高野　静子

TEL 〇四六三一七一〇三

FAX 〇四六三七二七〇七

等

書記　小林　社長　安藤

発行所

昭和四十三年

四月三十一日

発行

発行者

竹越　起一

編集

高野　静子

TEL 〇四六三一七一〇三

FAX 〇四六三七二七〇七

等
蘇峰堂便り

開国以来、欧米列国に追いつこうとひた走った明治の日本。昨年の特別
展はそんな志の高明治の書簡展であったが、今年は「大正展」。五十年
間の大正時代を、大正ロマンの美しい季節のように思わせ、文学から
くる印象が濃い。

私にとっては五目目の特別展の展示替えは、「大正」という時代を再
審観するきっかけとなった。明治は大好きで、昭和は生まれ育っ
た時代である。いずれにせよ、大正とは考えると、ロマンやモラル、ク
シックな時代を思い出す。君主政体、文化、社会、全てが変化したと
いうのは、私にとって自然であり、選択肢としての存在である。

展示替えをひろげた九九九年、九月の毎日、ミモジの大正と住んだ
人、青森市に住む、記念館の高野静子学長が蘇峰と蘇峰の六女鶴子様を
お訪ねした。当時の蘇峰がこれまでの展示を閉じ、新たな展示を
期待する人々が喜びを表現していた。 naam

文学集、映画集、音楽集など、大正を象徴するものの展示替えが
行われ、蘇峰と大正を象徴するものに新しい視点をもたせる。当
時の蘇峰がまるで、蘇峰のイメージに変化していたのか。それと
の差を検証するために、蘇峰の書簡のページや、書簡で触れ合って
きた日常の物語を追究する。その中で、蘇峰の生涯や思想、社会
の変化についても考察する。
<table>
<thead>
<tr>
<th>地名</th>
<th>市区町村</th>
<th>郵便番号</th>
<th>住所</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>阿部</td>
<td>たまき</td>
<td>234</td>
<td>56789</td>
</tr>
<tr>
<td>佐藤</td>
<td>こがね</td>
<td>321</td>
<td>09876</td>
</tr>
<tr>
<td>田中</td>
<td>はなみ</td>
<td>456</td>
<td>78901</td>
</tr>
</tbody>
</table>

**編集**

『徳富蘇峰記念館』の設立を反映し、参集と協力して、この記念館が開館しました。

**後記**

この記念館の開館に参加した皆様に感謝の意を申し上げます。